

## 文学博士河竹繁俊君の「日本演劇全史」に対する授賞審

### 査要旨

河竹繁俊君の「日本演劇全史」は全史の名にふさわしく、發生以來、今日に至るまでおよそ千三百年以上の演劇もしくは舞踊の歴史をあらゆる文献を渉獵し検討し一方精細な日本演劇・芸能年表及び索引を附加して千三百頁以上の大冊となっている。本文は「上世篇」一篇、「中世篇」一篇、「近世篇」五篇「近代篇」四篇より成り、「序説」一篇、「結語」一篇あわせて十三篇より成っている。

第一篇上世では古事記・日本書記に叙述されている天宇受売命の舞踊や火闌降命の演技をはじめ、日本演劇の始源となつた歌舞・神楽をとき、更に推古天皇の二十年（西曆六一二）二月に百濟人味摩之が日本に帰化して自分が異國で練習を積み重ねた伎楽舞を日本の少年に伝習させるようになってから、次第に行なわれた伎楽を、仮面舞踊劇として仮面の方面を主として考察し、つぎに舞樂に重点をおいて散樂から呪師猿樂その他の説明を加え、平安時代の末までに及ぶ。第二篇中世は能樂を中心とした寺院樂舞の延年舞、田園から發生したと見られる田樂の消長、足利時代に起つた猿樂能と能狂言を考察し、それらの江戸時代を通して現代に及ぶ過程を説明し、更に曲舞と幸若舞等に触れている。第三篇は近世の一端、創始期となっている。お国歌舞伎から若衆歌舞伎、野郎歌舞伎に至る過程を考察し、続き狂言の創始に及んでいる。第四篇は元祿歌舞伎を中心とした部分であり、坂田藤十郎と初代團十郎に焦点をおいた

俳優の考察が大部分を占め、脚本として近松の狂言本を扱っている。第五篇は人形浄瑠璃劇として傀儡師からはじめ、浄瑠璃と三味線の解説等を行ない、人形浄瑠璃の展回の章に金平浄瑠璃を中心に江戸の古浄瑠璃を説き、更に虎屋源太夫、喜太夫から伊藤出羽掾、井上播磨掾、宇治加賀掾を扱い、次章を黄金時代として竹本座と竹田座、豊竹座以下、国性爺の問題、吉田文三郎の問題に及んでいる。作者としては海音から出雲、一風、宗輔、半二、鬼外を経て焉馬に至るまでが一括されている。竹本座、豊竹座退転から文楽軒の出現、更に明治以後を含めて一章を立てている。再び歌舞伎に戻って第六篇として近世の第二次完成又は守成整頓の時代とする。宝暦年代を中心とし、二代目から五代目に至る団十郎と宗十郎、仲藏、幸四郎という江戸の俳優を一章とし、初代歌右エ門から雛助、為十郎と女方俳優までを一章とする。作者は次の章に入れて江戸の治兵衛、斗文、二三次、三笑、治助等と京阪の正三龜輔治藏五瓶等が考察されている。第七篇は化政歌舞伎を中心とした爛熟頹廢期となっている。まず歌舞伎音楽の成熟として義太夫節と豊後節系と長唄とにふれ、次に変化舞踊と生世話狂言に及び俳優では団藏、三四世の歌右エ門、三津五郎、七代目団十郎、次に松緑、菊五郎、五代目幸四郎、小団次、三代目仲藏、半四郎等があげられ、作者は南北を中心として如皋から黙阿弥までを入れ、京阪の徳三、七五三助、篤助、晴助等が扱われている。

第八篇以後が近代で、その一が近代の歌舞伎であり、明治の団菊中心に扱われているが、守田勘弥の件、散切狂言と活歴劇、演劇改良会の問題と歌舞伎座建設、明治の黙阿弥等が考察されている。その二は大正昭和期で菊吉中心になるが、左団次の新運動から文士劇、帝劇創立、二長町時代、震災前後と松竹の進出、前進座から戦争期とその後の状勢、東宝歌舞伎に及んでいる。第十篇は近代の第三で新派劇をまとめてある。発生期、全盛期、不振時代とに分け

曾我廼家なども扱つてある。次に第十一篇近代第四に新劇を一括して自由劇場、文芸協会に坪内逍遙の活動を大きくあげ、築地小劇場から左翼劇場、戦前戦後の諸派の新劇運動を考察し、転じて軽演劇として歌劇の類、児童劇、学校劇をも含めて現代演劇の諸現象を扱っている。

通観すると近世近代に重点が注がれていると言える。これはこの時代は資料も豊富であるためもあり、著者自身の関心もその部分に多く向けられている点もあろう。上代から中世へかけては演劇形態個々の考察を主としており近世は俳優の考察が主となり近代は演劇現象或は演劇運動の考察に主眼があるように認められるものも各時代の演劇の特色に基づくと見られる。

著者はこれを纏め上げるためにはおよそ十年以上の月日を必要としたというが、日本の演劇の歴史を上世から現代に至るまで、これほど精到に徹底的に調査研究するためには当然それだけの月日を費さなければならなかつたに相違ない。のみならずここには一つの演劇もしくは舞踊が次の時代、もしくはその次の時代に対してどういう影響を与えていつているかということに就き、全体としての発展のあとを追求するとともに、また或る場合は時代思想の変化によつて或る部分は捨て去られ、また或る部分は増補されなどして、それが今日までどういう形で表現されるようになっていのかを検討している点で、著者の集中力と感受性と検討力と渉猟性とかいかにも見事にできあがっていることを証明するものがこの演劇全史であるということが出来る。

部分的にも例えば歌舞伎の創始期の叙述の如き精細で創意も認められるとともに、一方では更に考察を進めてゆくべき部分もあり、戯曲作品についての考察は多くなされてない。然し日本演劇全体にわたつて総合的に扱い、これ

だけの成果をあげたのは学界に対する大きな寄与であると認められる。